

緑化・保全

特定非営利活動法人

つくばアーバンガーデニング

茨城県つくば市 [調査年度：H14 年度]

「女性庭師講座」から始まった花と緑のまちづくり活動が展開し、産官学民が協力する組織を設立して市民が主体となった公共用地の花壇整備、環境デザイン、交流活動を推進。この調査では、5年間の活動実績を検証し評価を試みるとともに、新たにNPO法人として発足する上での今後の活動の方向性について、市民の意見収集やワークショップを開催し検討した。

団体・活動概要

市民が中心となり、花のあるまちを育むため、市民をベースに産官学が協力して推進する組織を設立。つくば産の花を活用して、市民の立場に立つ専門家「アーバンガーデナー」が市民ボランティアとともに花壇整備・管理を実施。また、環境デザインや交流活動も行っている。

活動経緯

- ①活動の開始（1991～93） 事務局を担う暮らしの企画舎が、女性庭師講座を開講したところ、自分たちの力でまちを美しく住みよくしたい、という女性たちの力強い支持を受けた。
- ②継続的な活動へ（93～98） 活動助成を受け、「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」委員会を発足。公共の場所での花壇づくり、剪定の実習、起業の可能性の模索、ネットワークづくりなどを進めるうちにNPO「花と緑のまちづくりセンター」を構想するようになった。
- ③TUGの設立（98～） 市が、つくばの農家生産の花を市民の手で植えることにより、都心部を活性化したいと考えた。「女性庭師」の活動との意向が重なったことが発端となりTUGが誕生。

調査年度の活動概要

- 継続的な活動：公共用地の花壇整備、園芸セラピー勉強会、環境デザイン部会（花の似合うまちのデザインを市民の視点から実現する活動）、交流部会（「つくば100本のクリスマスツリー」、「花のフォーラム」の開催）など
- TUG活動5年間の実績検証：これまでの活動記録を作成し、5年間の活動で当初の目標の達成状況や活動の費用対効果について検証
- 今後の展開に向けてのプラットフォーム開設による意見収集・ワークショップの開催

活動の特徴・ポイント

- ①事務局、花の選定や管理について責任を持って担うアーバンガーデナー、灌水作業のスタッフ、デザイナーなど、有償のスタッフが活動を支えている
- ②市の各課、公的な団体（つくば都市交通センターなど）、企業、筑波大学や筑波技術短大などの専門家、市民が協働して進めている
- ③①、②によって、市民の労力やアイデアや希望が、公共の場所の活用や手入りに活かされている

出典：

「つくば市都心部における住民参加の花と緑のまちづくり事業5年間の実績検証と今後のあり方に対する意見収集のためのまちづくりプラットフォームの開設を通じたまちづくりの展開に向けた調査 報告書」H15.3 つくばアーバンガーデニング実行委員会

*この報告書の時点では「つくばアーバンガーデニング実行委員会」として活動し、平成15年3月末に「特定非営利活動法人 つくばアーバンガーデニング」となった。

1 | 活動の背景

1963年の閣議決定によりスタートした筑波研究学園都市の建設は、1980年に一応の「概成」を見て、さらに1985年に開かれた科学万博前後に都市的な体裁も整った。1987年には4町村が合併、翌年には1町が加わり、研究学園都市のまわりを、その約5倍の広大な田園地域が取り囲むつくば市が誕生した。

1997年、建設事業の中心であった住宅・都市整備公団が、つくば開発事業を清算することとなり、つくばは大きな節目を迎えた。同時に国土庁大都市整備局大都市圏整備局特別整備課も、筑波研究学園都市はほぼ目標を達成したと語った。いよいよつくばのまちづくりは、市と市民に全面的に委ねられることになった。

では、つくばは十分魅力的なまちになっただろうか。つくばの中心地区には、磯崎新設計のつくばセンタービルはじめ、有名建築家の作品が建築博物館のように並んでいる。また公園の1人あたり面積は9.65㎡（2003年2月現在）で他都市のそれを大きく上回っており、しかも

公園と公園は計画的にペDESTリアンデッキで結ばれている。広い大通りに立ち並ぶ街路樹は、大きく成長してまちに風格を与えている。それでも、「自分たちのまちという感じがしない」「あたたかみがない」「歩く人がいない…」そんな思いを市も、市民も共有していた。しかも、建築後10数年を経た建物や広場は老朽化が始まり、敷石はひび割れ、黒ずみ、雑草ははびこって、荒れて見捨てられた雰囲気が広がりつつあった。

一方、右肩上がりの時代につくられた「常磐新線と沿線開発」という計画が、現実のものとなって目前に迫りつつあった。「東京都心とつくばという2大国際情報発信拠点を直結し、沿線を開発する」というコンセプトのもとに、筑波研究学園都市に対し、面積で4倍弱、人口5.6倍の大事業が遂行されようとしている。人口減少、都心回帰の時代と言われながら、始まってしまった事業は止められず、大きな負債と不安、漠然とした期待をはらみながら、工事は急ピッチで進められている。

2 | 活動の経緯と目的

1 | 活動の経緯

①市の方針

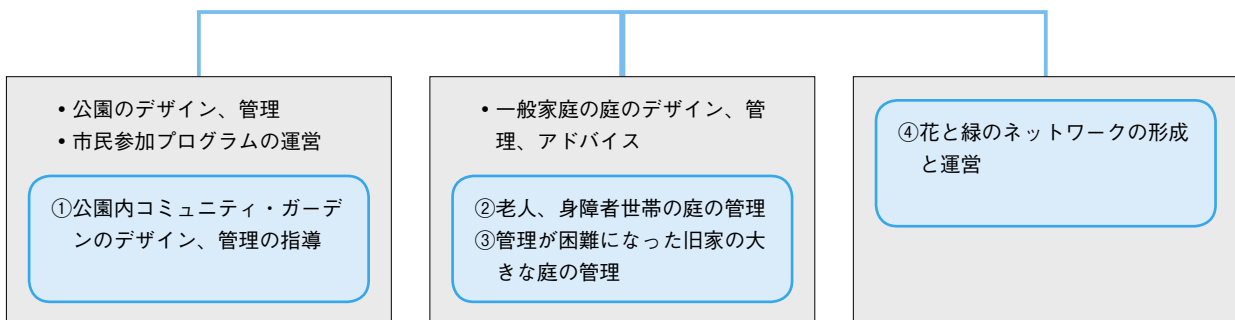
このような状況の中で、1998年のつくば国際会議場のオープンを前に、市内農家生産の花を、市民の手で植えて、中心地区を活性化し、国内外からのお客様を温かく迎えようという考えが市から出された。それを、行政が直接ではなく、市民を中心に、産官学が協力して進めていこうというのである。

②花と緑のまちづくり活動

市民の間には、もともと様々な緑に関わる活動があったが、その一つに女性の企画グループ暮らしの企画舎が始めた「女性庭師講座」があった。1991年に、造園会社の後援を受けてつくばで始まったこの講座は、大きな反響を呼び、水戸、取手など各地で、市民や造園会社の要請を受けて数回にわたって行われた。1993年に講座の

花と緑のまちづくりセンター構想

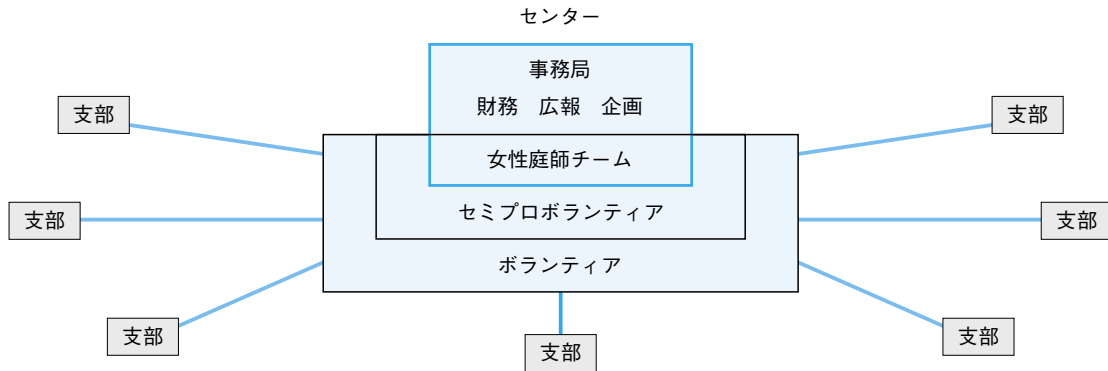
業務内容



試みるのは①②③④

受講生が集まって「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」委員会をつくり、ハウジングアンドコミュニティ財団の第一回住まいとコミュニティづくり活動助成を受けて、講座は継続的な活動へと発展した。やがて参加者の中からは、技能を身に付けて、造園施工管理技士、造園技能士、樹木医などの資格を取得して、自ら造園業

を営んだり、造園会社に就職したりするプロの道にはいる人たちがあらわれた。一方、自分たちがつくった花の庭にお年寄りを招いたり、花苗の交換会をしたりするボランティアの輪も広がり、この両方の力を地域に生かすために、「花と緑のまちづくりセンター」の構想が活動から生まれた。



いろいろな公園に支部がある。でも、それは公園管理のための支部ではなく、いろいろな庭と庭とをいろいろなかたちで結ぶためのもの。毎年、ボランティアを募集し、セミボランティアを育てていく。例えば小さい子を持つお母さんもボランティアになれる。時期がくれば、他の職業につくことも、女性庭師になることもできる。

③ TUGの誕生

しかし、この構想は実現することなく、数年間にわたって市の空き地を借りてのボランティア活動が続いていた。そこへ、市の、花による中心市街地活性化の構想が生まれ、「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」委員会の活動を支えてきた暮らしの企画舎に相談が持ち込まれた。そこで生まれたのが、図2のようなつくばアーバンガーデニング実行委員会（略称TUG）である。

④ TUGの組織

組織の特徴は、

- 産官学民が幅広い協力体制をとっていること
- 市も窓口は市民活動課だが、関係する各課が実行委員となって横断的な体制を取っていること
- 「女性庭師講座」、「花と緑のまちづくりを女性庭師た

ちの手で」委員会から育った「女性庭師」たちが「アーバンガーデナー」となり、市民の立場に立つ専門家として、有償で花と緑の管理の中核を担っていることなどである。

アーバンガーデナーが責任を持って、花を選定し、農家に育苗を依頼し、花壇をデザインし、市民ボランティアを指導して花植えをし、その後も市民ボランティアと共に手入れをしていく。そして、暮らしの企画舎が担うことになった事務局も、実行委員会の意見を反映させつつ、有償で事業を推進していく。花と緑のまちづくりセンターの一部が、形を変えて実現したと言える。

図2 組織図

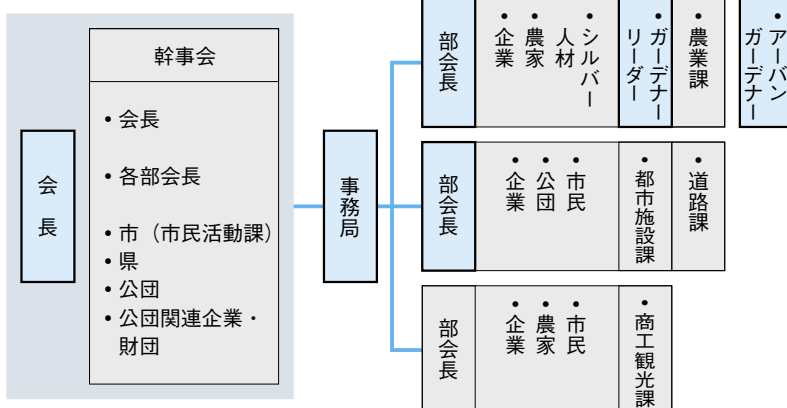


図3



2 TUGの目的

市から要請された目標は、次のとおりであった。

- つくばの玄関口であるセンター地区をセンスのよい花で飾り、訪れる人につくば市民の温かい心を伝える。
- 園芸農業の振興。
- 都市住民と農村住民の交流。
- 市民参加の象徴的事業とする。

上記を踏まえて、TUGは次の基本方針を打ち出した。

- 市民が中心となって、花のあるまちを育むことで、まちづくりの心を育て、つくばらしさを創生していく。
- 市民をベースに、産・官・学が協力して推進することで、一体感のある美しいまちをつくる。
- 花の魅力をとおして、つくばに住む人、訪れる人、すべての人々の交流をはかる。

3 活動の内容

1 継続的な活動

前述の基本方針のもとに、図のような活動を展開している。

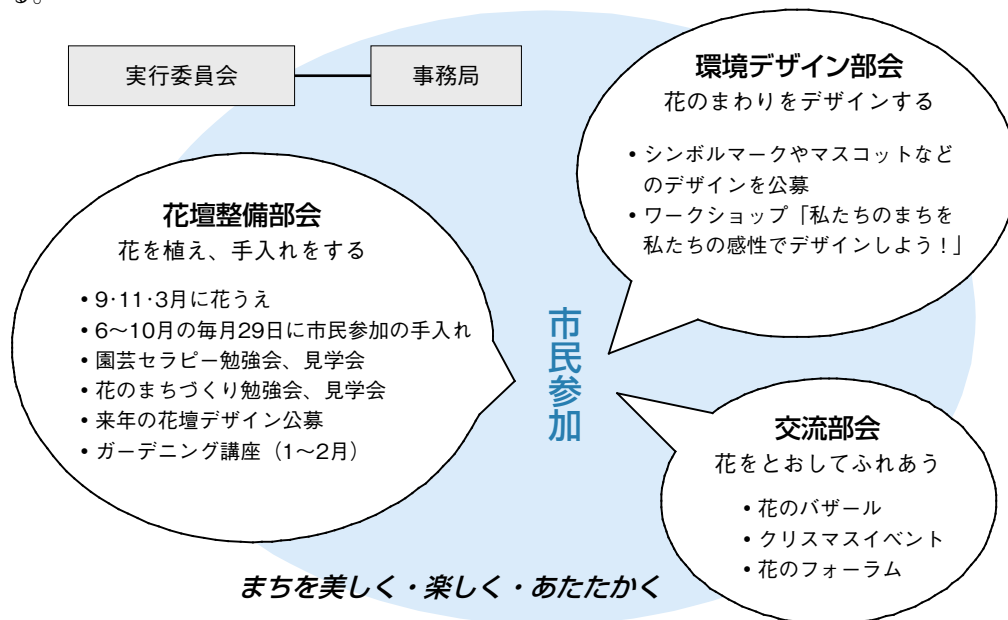


図4 TUGの事業

①花壇整備部会

a. 花壇整備

毎年拡大して5年目の2002年度は計3500平米の花壇、プランターに、花を植え管理している。年4回の「みんなで花をうえよう！」と週1回の手入れ、春～秋は毎日、冬は週2回程度の灌水作業がある。アーバンガーデナーは、現在10名、灌水作業員は4名のシルバー世代の男性と筑波大学の学生グループが交代で行っている。

2月23日に、今年最初の「みんなで花をうえよう！」を実施した。つくばセンタービルペデストリアンデッキの46本のケヤキの根元に、パンジーを植えた。



写真1 みんなで花をうえよう

b. 園芸セラピー勉強会

2001年に、高齢者や障害者もふくめて、すべての人が園芸を楽しむことができるユニバーサルデザインの「いやしの庭」を市民参加でデザインし、(財)都市緑化基金等が主催する緑のデザイン賞に応募、入賞して、副賞の緑化助成により、「松見公園」に建設した。土地は市のもので、上物はTUGが所有しているという珍しいケースである。

「松見公園」は市内で最も人気のある公園の一つだが、造られてから20年以上になり老朽化が進んでいる。展望塔のある建物にテナントとしてはいていた喫茶店も今は撤退し、公園を囲むコンクリートの造形物に埋め込まれたライトも切れたままになっている。「いやしの庭」



写真2 いやしの庭に春の花を植える

②環境デザイン部会

花の似合うまちにふさわしい「まちの家具」を市民の感覚でデザイン、制作する。1～3月は、「いやしの庭」の看板兼掲示板のデザインと制作を行った。公園を訪れる一般の人々に、この庭を、誰が、どんな目的のために、どのようにして作ったのかをわかってもらうことと、高齢者や障害者と花と緑を通して交流するイベントへの参加の呼びかけを掲示することが目的である。



写真4 つくば100本のクリスマスツリー

の完成以来、「自閉症青年の自立を助ける会」が、「いやしの庭」の手入れを活動の中心とするようになり、建物も拠点として活用している。コンクリートの造形物は、市内の中学生の石彫作品の展示スペースとして使われ、息を吹き返した。隣の病院で療養中の患者さんなど、車椅子の人々もしばしば庭を訪れ花や緑を楽しんでいる。

2002年度は、この庭をさらに活用する方法を学ぼうと1年間にわたって「いやしのガーデナー講座」を開講した。1～3月は、その3学期にあたり、1月18日、2月15日、3月15日と講座を行い、園芸療法のプログラムの立て方を学び、3月にはお年寄りを対象とするプログラムを実際に行った。



写真3 シニアガーデンにて

③交流部会

暮れに「つくば100本のクリスマスツリー」という一大イベントを行っているので、1～2月は小休止の時期だが、3月には、毎年、活動のまとめとして「花のフォーラム」を開催し、活動の報告と講師を迎えての講演会を行う。今年は5年目の節目なので、講演会を行わず、これまでにTUGに関わった人々に声をかけ、いっしょに「いやしの庭」に春の花を植え、その後一品もちよりのなごやかなパーティーを開き、TUGのこれまでと今後について意見を交換した。



写真5 花のフォーラム

2 TUG活動5年間の実績検証

TUG発足時に、実行委員会として5年間の事業を行い、その間補助金を拠出するという議会に対する市の説明があったところから、5年を過ぎた後は、別の形での事業の継続が想定されていた。NPO法人となり、これまでで行ってきたいくつかの事業について、市が委託するという形を取りたいとの市の要望があり、2003年度からは再出発をすることとなっている。

そこで、プロカメラマンによる5000枚の記録写真、スタッフによる3000枚の記録写真、資料を整理し、5年間の実績を振り返り、実績を検証すると共に、パワーポイントにまとめることにした。

次に実績についての議論のあらましを記載する。

① TUGは目標をクリアしたか

○センター地区を美しくセンスのよい花で飾り、訪れる人に市民の温かい心を伝える。

- 発足2年目の1999年、全国花のまちづくりコンクール団体部門最優秀となり建設大臣賞を受けた。その際、「空間構成が巧みで、周囲の建物とよく調和したデザイン」が評価された。
- つくば市社会福祉協議会の「つくばまちづくりコンクール…やさしいまちってどんなまち？」においても、子供たちの作文や絵に、「やさしい風景」として取り上げられることが多い。

以上から、センター地区が花で美しくなり、市民の温かい心が伝わる雰囲気が生まれたと言える。

○園芸農業の振興／都市住民と農村住民の交流

- つくば市花卉生産者連絡協議会を通じて、できるかぎり地元で生産される苗を植えている。毎回の花植えの数ヶ月前に、つくば市花卉生産者連絡協議会、農業改良普及センター、アーバンガーデナーリーダー、TUG事務局が話し合いの場を持ち、どんな苗を何株、いくらで、誰が生産するかを決め、花植え当日に、そ

れぞれの農家が、TUGが指定した場所に届けるという方式がとられている。

- 公共の場所に、毎年約5万株、約400万円の地元生産の苗が植えられている。

TUG活動前は、花の量がずっと少なかった。それが地元産であることもなく、農家は市場に出荷していたし、業者は市場から仕入れていた。その点では非常に画期的であった。

- 農家の側から、普段作り慣れている一般的な花苗を大量に買ってほしいという希望があった。これまで作ったことのない苗を200～300株程度の単位で作らされるのは効率が悪いという不満が出た。
- TUGの側では、農家に、これから人気が出ると思われる目新しい花にチャレンジしてもらいたい希望があった。
- TUGの側では、市場を通さないこと、注文生産であることから、市場価格より安い値段で取引したかったが、農家としては、少しでも高く売りたいがかった。
- 意見の一致しない点はあったものの、真剣なやりとりを通してお互いを理解するという意味で、有意義だった。
- 取引以外にも、「寄せ植えでまちを飾ろう」などの企画では、市民がバスで数軒の農家をまわって思い思いの苗を買い、寄せ植えをつくって、市民手作りのプランターが数ヶ月間センターを飾るという試みをし、市民につくばの花に親しみを持ってもらう機会とした。
- センターに植えた花が盛りになると、農家の人たちが見に来てくれ、自分たちの育てた花がセンターを美しくしていることを大変喜んでくれた。

以上から、課題はあるものの、これまでになかった交流が生まれていると言える。

○市民参加の象徴的事業になったか

- TUGは、個人が自由意志で参加することが原則なので、数百人、数千人の市民が一斉に花を植えるという光景は見られない。しかし、毎回の花植えには平均40名が集まり、和気藹々と作業が進められる状況が定着している。幼児から高齢者まで、また学生から主婦まで、幅広い参加がある。
- 「つくば100本のクリスマスツリー」には、小学生を中心に多く（2002年度759点）の応募があり、そのうち約60点が選ばれて、ツリーづくりに参加する。子供が応募して、つくるのは家族ぐるみなので、「まちづくり」などに特に関心のない、一般の人たちを誘い込む仕掛けとなっている。残りの40本も、福祉団体などのツリーで、1本1本に数人から数十人の人々



写真6 農家による花苗の搬入

が関わっている。作品を作るというだけでなく、公共の場を、自分たちの作品で飾り、賑やかにすることで、まちへの帰属意識が生まれる。「住んで20年になるが、初めて住民という意識を持った」という感想が、今年の参加者のアンケートに見られた。

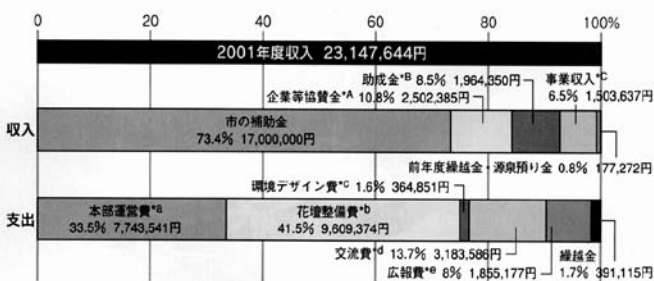
以上から、特にこの点に関しては、十分な効果があったと考える。

②費用対効果は

下図は、TUGニュースに掲載した2001年度の年次報告と4年間を通しての会計報告である。

- 1年間の会計について見ると、2300万の事業費は市

会計報告2001 平成13年4月1日～平成14年3月31日



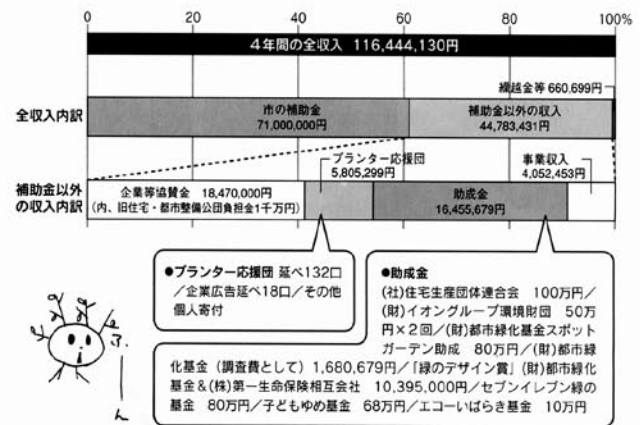
収入^A: 実行委員会協賛金、プランター応援団、個人寄付等 ^B: センインレブみどりの基金、子どもゆめ基金等 ^C: 講座受講料、花苗・制作物の売上等
 支出^a: 家賃、光熱費、事務用品費、通信費、事務局業務委託費等(作業員6人) ^b: 花苗代、灌水・手入れ等の作業費、設備費、花壇業務委託費、ガーテナー養成費等(作業員25人) ^c: ワークショップ講師料、手作りプランター・看板等制作費等(作業員3人) ^d: 花のフォーラム・クリスマスイベント開催運営費等(作業員20人) ^e: TUGニュース・TUGファイル・花守りさん等発行費(作業員5人)
 ※作業員の人数は継続的に作業している人数

図2

民活動としては大きく見えるが、有償スタッフ61人の経費と家賃、光熱費等の経常経費が含まれることを考えれば、決して余裕のある額ではない。

- 有償スタッフのほか、無償のボランティアが協力してくれているので、実際にはもっと大きな事業を行っている。
- さらに、4年間に市が拠出した補助金は7100万円と巨額ではあるが、TUGがその他の方法で集めた資金も4478万円にのぼり、公共の場作りや市民活動のためにそれだけの額が使われたことは、つくば市にとって大きなプラスであったと考える。

市の補助金以外の収入が4年間で4,478万円 平成10年～13年の合計



3 今後の展開に向けての活動

①プラットホームの開設による意見収集

初めに述べたように、つくばエクスプレス沿線には、筑波研究学園都市の4、5倍という、常識的に考えれば不可能と思われる大規模な開発の予定がある。この計画をできる限りよい方向に導くためには、つくばの魅力である緑と広々とした空間を最大限に活かすことが鍵となる。

緑と空間が魅力であるためには適切な手入れが必要であり、そのために、TUGの体験が参考になると思われるところから、「まちづくりプラットホーム」を開設し、今後の緑の管理のあり方について、意見を収集した。

イメージを持ちやすいように、住宅地〔庭・住宅地内の共有地・児童公園〕、公共地〔公園・道路〕、公共・民間地〔施設周辺・駅前広場〕、その他〔学校の庭・保健保安林・商店街等〕に分けて、それぞれについて、以下のよう質問をした。

- どんなふうに使われるとよいか

- どんなふう管理するとよいか

- 誰が管理するか

- 誰が費用を負担するか

その結果、多くの意見、アイデアが集まった。

代表的な意見「19世紀までの日本列島に生きた地域管理の知恵を発掘、再評価してみよう。例えば、入会地の管理などはみごとな先例。それを土地公有化の中で、地域の連帯すら見失って、官任せの慣れを身につけてしまった」に見られるように、住む人が、自分の家だけでなく、地域を守り育てることに、主体的に関わっていくべきだという認識を、多くの人が持っていることがわかった。またそれを賄う費用についても、「“ごちボラ”システムつくば版(たとえばつくばの物産を購入すると5%は指定団体に寄付される)」など、新しいアイデアも数多く提案された。

その中から、アメリカの住宅地に見られるホームオーナーズアソシエーション(HOA)への関心が生まれ、

HOA研究の第一人者である明海大学助教授の齊藤広子氏を招いてのワークショップを開催することになった。

②ワークショップ開催

日時：3月14日午後5時半～8時半

場所：都市公団会議室

参加者：一般市民、筑波大教員、学生、つくば市新線推進室、茨城県企画部新線沿線整備課、都市公団つくば整備部事業計画課など沿線開発関係者計35名

1. つくばアーバンガーデニング5年間の報告

2. HOA研究の第一人者齊藤広子氏による講演

HOAは、単純に言うと、マンションの管理組合を平たくしたような組織。そこに住む全員が参加し、集まって住むメリットを生かして、住民自身が、主体的に、質の高い、多様性に富む住環境をつくっていくための組織であること。阪神淡路大震災の際、あらためて、近隣の重要性が意識されて、日本でもHOAのある新しい住宅地のすばらしい例が増えつつある。

1. そもそもアメリカでは？

- クラスター開発やPUD
- 付加価値をつける⇒地域制と宅地分割規制とカベナント
- アメリカHOAの発祥の地、ラドバーンでは？

2. 日本の場合は？

- 個別事例
 - グリーントウン高尾
 - グリーンテラス城山
 - 大分パークシティ
 - 横浜緑園都市
- 全体的傾向

3. 筑波大学外国人教師ブライアン・ベーカー氏によるアメリカのHOAについての考察

- 訴訟好きな社会であるアメリカにおいては、HOAは

悪評が高い。もっと協調性のある日本のような社会では、HOAは、コミュニティにサービスを提供したり、コミュニティの質を高めたりする役割を果たす、よりよいものとなる可能性がある。

- HOAのルールや禁止事項は、単純で、理解しやすく、そのコミュニティに即していなくてはならない。
- 個人の権利を制限することなしに、コミュニティの規律を生むこととの間に調和が保たれることが重要である。本来の目的である、住む人みんなによって維持されるコモンスペース（建物であれ、風景であれ）のある質の高いコミュニティは、住む人にそこに住むことの心地よさを感じさせる。

4. 筑波大学助教授渡和由氏による「セルスケープ」についての考察

「セルスケープ」は普通、「売らんかな」の姿勢の悪い風景の意味に使われるが、逆に良質なランドスケープを「セルスケープ」と呼んでみる。米国住宅地にみられるランドスケープ—セルスケープの役割と重要性は顕著である。その手法は、以下のとおり。

- ランドスケープによるアメニティと眺望の明確化
- 地域、地区、区画レベルでの特徴づけと多様化
- 公園を視覚的焦点とし、顕在化する配置と道路計画
- まちなみを親密化する建築計画と外観・室内計画
- 商業と住宅がオープンスペースに面する敷地計画
- ライフスタイルの混在と複合化に適した地域計画
- 自然享受と農や花と共存する管理運営組織の設置

「セルスケープ」の概念は、わが国でも良好な生活感と社会資本形成のために適用可能である。

5. 意見交換

HOAを、これからの住宅地建設に生かして行きたいという意見が多く出された。また、HOAとTUGの組み合わせによるまちの管理、あるいは、地方自治体とHOAとの関係をどのように築いていくかが課題などの意見もあった。

4 | 今後の展開

プラットホームとワークショップから集まった声、学んだことを踏まえ、TUGはNPOつくばアーバンガーデニングとして、新しい歩みを始めなくてはならない。住む人の組織であるHOAとTUGは本来異なるものだが、共通する点も多く、「住む人」をまちじゅうに広げたのがTUGであるとも言える。

まちの緑について、

- 誰が、どの部分を、どのように、担うのか。
- お金を出すのが誰か。
- 労力を提供するの誰か
- マネジメントをするの誰か

常に、これらを問い、明らかにしながら、活動を進めていくのが、まちを市民のものにしていく上で必要なことだと考える。